

## 研究・調査報告書

報告書番号	担当
286	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
<b>題名 (原題/訳)</b>	
Long-term probability of and mortality from de novo malignancy after liver transplantation. 肝移植後の新規悪性腫瘍の発生率と死亡率の長期追跡	
<b>執筆者</b>	
Watt KD, Pedersen RA, Kremers WK, Heimbach JK, Sanchez W, Gores GJ.	
<b>掲載誌 (番号又は発行年月日)</b>	
Gastroenterology. 2009 Dec;137(6):2010-7. Epub 2009 Sep 18.	
<b>キーワード</b>	
肝臓移植、新規悪性腫瘍、アルコール関連肝疾患	
<b>要 旨</b>	
<b>目的：</b> 肝移植後の患者における新規悪性腫瘍発生率とリスクファクターを評価することを目的として、多施設の前向きに得られたデータベースを分析した。	
<b>方法：</b> 1990年4月15日から1994年6月30日の間に移植を受け2003年1月までの長期間の追跡データのあり National Institute of Diabetes and Digestive and Kidney Diseases の肝臓移植データベースに登録されていた移植時18歳以上であった798人を分析した。この患者集団のうち、171人の患者が271の新規の悪性腫瘍を発症した。これらの悪性腫瘍のうち、147は皮膚に関係し、29は血液、95は固形臓器癌であり、我々は皮膚以外の悪性腫瘍に注目した。	
<b>結果：</b> 皮膚以外の悪性腫瘍が発生する確率は、原発性硬化性胆管炎 (Primary Sclerosing Cholangitis : PSC ; 10年で22%) またはアルコール関連の肝疾患 (alcohol-related liver disease : ALD ; 10年で18%) を有した患者で最も高く、他のすべての診断には10%の確率があった。多変量解析を行った結果、10年ごとの年齢上昇 (ハザード比(HR) =1.33, p=0.01) , 喫煙歴 (HR=1.6, p=0.046) , PSC (HR=2.5, p=0.001) , ALD (HR=2.1, p=0.01) が、肝移植後の固形の悪性腫瘍の発生に関係していた。血液と固形悪性腫瘍の診断後の死亡率は、それぞれ1年で44.0%と38.0%で、5年では57.6%と53.1%だった。	
<b>結論：</b> 新規の悪性腫瘍は、原発性硬化性胆管炎やアルコール関連の肝疾患を有する患者の長期生存に、他の移植患者と比べて著しい影響がある。	